

国

語

(時間 五十分)

【注意事項】

- 1、試験開始の合図があるまで中を開いて見 はいけません。
- 2、受験番号を問題用紙・解答用紙の決められた欄に必ず記入しなさい。
- 3、問題は十六ページあります。問題が抜けている場合、印刷がはっきりしない場合は申し出なさい。
- 4、問題文には、原文(原作)の一部を省略したり、文字づかいや送りがなを改めたところがあります。
- 5、答えは解答用紙の決められた箇所かしよに記入しなさい。
- 6、何か用事ができた時は、だまって手をあげなさい。ただし問題の内容についての質問をしてはいけません。
- 7、試験終了のチャイムが鳴ったら答えを書き続けてはいけません。すぐに筆記用具を置いて答案の回収を待ってください。
- 8、問題用紙は持ち帰ってかまいません。

受験番号

--

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。本文には作問の都合上表現を改めたところがあります。

パリのレストランで仕事をしている「僕」は、母が危篤という知らせを受け故郷のブルターニュ（フランスの地名）に帰ってきた。

母は土色に乾いて縮んでいた。まるで脱穀を終えた麦藁のようだった。彼女の命が燃えつきようとしているのは一目瞭然だった。

「ああ、ジャンカ」

けれど母は僕の顔を見るなり気丈にも毒づいたんだ。

「親不孝者がやっと帰ってきた。六年間もどこで何をしてたんだか」

二度と帰ってくるなと命じたのは母さんのほうだ。そう返したいのをこらえて僕は言った。

「修行だよ。今はパリの二つ星レストランにいる」

「二つ星？」

「レストランの評価だよ。それだけ洗練された料理を出す店ってこと」

母は皺だらけの首を力なく揺すった。

「人間は②のために食べるんだ。都会の人間はそれを忘れてる」

「でも、たまには③のための食事だって……」

「で、おまえはどんな料理を作るんだい」

あいかわらず母は言うばかりで聞く耳を持たない。

「今はパルフェを担当してる」

「大の男がデザートか」

「最後の記憶として舌に残るデザートは重要だよ。今じゃオリジナルメニューも任されてて、ときどきクレープも作るんだ」

「クレープ？」

④ 母の瞳が用心深げな光をちらつかせた。

「それはもちろん、しょっぱいクレープのことだろうね」

「いや、甘いクレープだよ。しょっぱいクレープはデザートに合わない」

ブルターニュ発祥のクレープには二つの種類がある。黒麦粉から作る茶褐色のガレットと、小麦粉から作る乳白色のクレープ。母は前者を「しょっぱいクレープ」と呼んでブルターニュの王道と見なし、

後者を「甘いクレープ」と邪道扱いしていた。

「甘いクレープなんて紛いものだよ。ブルトン人があんなものを客に出すなんて、情けない」

「母さん、まだそんなこと言ってるの？ 確かに昔はガレットが主流だったかもしれないけど、今は時代が違うよ。パリじゃ口当たりのいい甘いクレープが大人気なんだ」

「誰がパリの話なんかした？ まったく、おまえはあいかわらずだね。これっぽっちも変わってない。」

「母さん、まだそんなこと言ってるの？ 確かに昔はガレットが主流だったかもしれないけど、今は時代が違うよ。パリじゃ口当たりのいい甘いクレープが大人気なんだ」

「誰がパリの話なんかした？ まったく、おまえはあいかわらずだね。これっぽっちも変わってない。」

六年前から少しも成長してないよ」

結局、いつもの言い合いとなった。

「母さんこそ。あいかわらず人の話を聞かないし、僕のすることなすこと否定する。結局、僕が何をしたら認めてちゃくれななんだよ」

「ま、生きてるあいだは無理そうだね」

母は真顔でうなずいた。

「こうなったら死後にでも期待するしかない」

「死後？」

「死んだ人間は一度だけ形を変えてこの世に戻ることができると。私がおまえを認めるとき、仮にそんなときが訪れるとしたら、私は花に姿を変えておまえに知らせよう」

「花……」

「五枚の⑤だよ」

最後は茶目つ気をこめて笑った。彼女が若くてエネルギーギッシユだった頃を思わせる笑顔だった。なんだ、まだくたばりそうにないじゃないか。母の頑迷さに苛立ちながらも一方で僕は安堵した。

その翌朝の曙の頃、母は五十四歳の命を締めくくった。

その後「僕」はサラという女性と結婚し、自らの料理の腕前を生かして、素朴で居心地のよい民宿（ターブル・ドット）を開くことになり、親戚や二人の友人とともに宿の完成パーティーが行われた。母を亡くしてから十五年が経っていた。

盛況のうちにパーティーが終わり、家族手分けして後片づけを済ますと、僕とサラは月明かりに照らされた庭のテラスで静かな余韻にひたった。ようやくここまでこぎつけた。僕たちの中には揺るぎない達成感があった。と同時に、本番はこれからであることも忘れていなかった。

「最初の一、二年は厳しいでしょうね。来週からオープンなのに、予約はまだ二組だけ。それもあなたのいとこと私の両親だもの」

サラは現実的だった。

「でも、きつと三年目から部屋が埋まりだす。私はそれを信じてる。だって、本当に素敵な宿ができあがったんだもの。それに、あなたの料理がある」

「最初の二年が我慢どころってわけか」

見通しは厳しいながらも僕たちの声は明るかった。二人とも我慢には自信があったのだ。

「それでね、ジャン。思ったんだけど、どうせなら空いた時間があるうちに、できることをやっておかない？」

「できること？」

「今日、みんなの顔を見ながら思ったの。この宿は地元みんなのおかげで完成したようなものでしょ

う。だから私たちもこの宿を通じて、何か地元へのお返しができないかなって

「お返し、か」

⑦ 僕はなにかば感心し、なにかば呆れてつぶやいた。この奥さんはいいつも半歩くらい先から僕をふりかえり、新たな課題を投げかけるのだ。

「たとえば……料理の食材は地元のものを使うとか、そういうこと？」

「そう、徹底して地元産にこだわるとか。あと、よそから来たお客さんを地元の料理でもてなして、食事を通じてブルターニュの魅力を知ってもらおうとか」

「なるほど。地元の料理か」

僕は考えた。いや、考えるふりをした。本当は考えるまでもなく、瞬時にある一品がひらめいていたのだ。

良くも悪しくも僕の人生に植えつけられたブルターニュの味。

「しょっぱいクレープね」

僕の目を見てサラが微笑んだ。

「あなたのお母さんがこだわりつづけたガレット」

「うん、でもノスタルジーだけじゃだめだ。ガレットの持つ独特の塩気、あれを生かした新しい一品ができないかな。地元のビーツやアーティチョークと組み合わせたりして、サラダ風の前菜に」

「うん、食べてみたい。一刻も早く」

「そうはいかない」。料理への意欲が久々に僕を駆りたてていた。「まずは黒麦だ。この辺で黒麦を育てる農家を探さなきゃ」

「そこまでこだわること？」

「食材は ⑧。そう言ったのは君だよ」

僕は常ならぬスピードで、早速、翌日から行動を開始した。食材探しも兼ねて近場の農家を一軒ずつ訪ね、黒麦畑に関する情報を求めてまわったのだ。が、甘かった。

昔は⑨ フィニステール中であつたといわれる黒麦畑は、今では完全にその影をひそめていた。

「黒麦畑で食べてる農家はもういないよ」

誰もがそう口をそろえた。安い輸入物の黒麦粉が出回りはじめて以来、黒麦を育てても採算が合わず、ほかの作物に鞍替えする農家が続出したのだという。遠地へ行けばまだ残っているかもしれないが、それでは地元の食材にこだわるといふ本旨を逸脱してしまう。

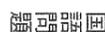
早くも暗礁に乗りあげていた僕に意外な助け船を出してくれたのは、いとこのアンヌだった。ターブル・ドットの一番客として僕たちの宿を訪れた彼女は言ったのだ。

注1 ノスタルジー―昔を懐かしむ心。

注2 フィニステール―ブルターニュの中の一地方。

注3 本旨を逸脱してしまう―本来の目的から外れてしまう。

注4 暗礁に乗りあげていた―いきづまっていた。



「黒麦だったら昔、あなたの両親が育てていたじゃない」

「うん、でももう四十年前のことだし、畑はどうに売ってるし」

「その畑を買った人、今でも細々と黒麦を育ててるらしいって話を聞いたことあるけど」

「本当？」

果たして本当であった。ローラン伯父さんに電話で確認したところ、黒麦畑を継いだのは同郷のギスランさんという男で、もともと僕の両親とは旧知の間柄だったという。父の死後、母だけでは畑をやつていられないだろうとの憂慮から買い取りを申し出てくれたらしい。そして年老い、畑仕事を引退した今も、一部の黒麦畑は手放さずにいるとのことだった。

なぜ今でも黒麦畑を？

この謎は会ってから解くことにした。

逸る思いでギスランさんへ連絡をした僕は、「ルネとアネットの息子なら大歓迎だ」との返事に甘え、その翌日には黒麦畑を見に行かせてもらう約束を取りつけた。これまた僕らからぬ早業だとサラには驚かれたけれど、実のところ自分では遅すぎた気がしてしょうがなかった。とてつもないまわり道をしてしまったような。

黒麦畑を見るのは初めてだった。

いや、正しく言えば遠い昔、両親が黒麦を育てていた時代に見てはいたのだろう。少なくとも瞳に映しはしたはずだ。が、僕はまだあまりに幼すぎ、物心がついたときには父も畑も失っていた。よって、僕が黒麦に関して持ち得るのは書物から得た知識だけだ。

意外に思われるかもしれないけれど、黒麦は麦の仲間ではない。山羊と鹿くらい種が違う。なのになぜ「麦」が付くのか気になるところだが、もしかしたら小麦粉に黒色をまぶしたような粉が穫れるため、愛称的に黒麦と呼ばれたのが発端かもしれない。

実際はその形状も性質も麦とは似ても似つかない。そもそもイネ科の麦に対して黒麦はタデ科に属し、穂を持つかわりに花びらを持つ。日本では黒麦粉から作る麺が古くから親しまれている。と、知識としてはわきまえていた。

しかし、ギスランさんに導かれて黒麦畑の前に立った瞬間、それでもやはり僕は大きく息を呑み、呆気に取られずにはいらなかった。

▼ 仄かに黄味を帯びた温かな緑色。子供の掌ほどもある豊かな葉。その先端に点々と連なる小さなつぼみ。目前に広がっているのはかつて見たことのない未知なる植物の群生だった。押しあいへしあいするように葉を絡ませて地面の土を隠し、圧倒的な生命力を空へと立ち昇らせている。

「これが、黒麦……」

「そう、これが黒麦だ」

魅せられ、立ちつくす僕にギスランさんが言った。

注5 憂慮、心配。

「どこでも育つし、放っておいても伸びていく。これほど頼もしい作物はほかにない」

確かに頼もしい光景だった。麦の穂が風を受けて織りなす優雅な波のような、あの整然とした美しさがここにある。一葉一葉が勝手に陽を浴び、思い思いに風に吹かれてざわざわ踊っている。その奔放な躍動に命の力が漲り、むせかえらんばかりの生気を発散する。まるで手を伸ばせば伝わってくる確かな熱のような。▲

「あと二週間もすれば花が咲き、二ヶ月で実が穫れるだろう。それであなたがガレットを作りたいなら、いくらでも好きに持っていいさ。どうせ趣味の畑だし、ルネとアネットの息子に役立ててもらえるなら本望だ」

白い髭をたくわえた口もとを笑ませるギスランさんに僕は尋ねた。

「なぜ趣味で黒麦畑を？」

「さあ、なぜだろうな。ブルターニユの代名詞でもあった黒麦がどんどん消えていく。それに抗いたかったのかも。それに、ここにいとアネットを思い出すんだ」

「母を？」

「自由気儘で、生命力に溢れて。黒麦はアネットに似ているよ」

遠き日を偲ぶようにまぶたを閉じるギスランさんの横で、僕は瞳を瞬かせた。

「それ、本当に母のことですか？ 僕の母は自由どころじゃありませんでした。土着の因習に縛られて、迷信にふりまわされて、毎日汲々として」

「それはルネが逝ってからだろう。夫婦で黒麦を育てていた頃のアネットは、それはそれは生き生きとした跳ねっかえり娘だったよ。歩くのもじれったそうに、そこいら中を駆けまわっていた。ルネと一緒に畑を広げて、いつかブルターニユ中を黒麦で埋めつくしてやるんだと息巻いてたもんだ」

「母さんが……」

信じがたい思いで再び黒麦畑へ目を馳せた。埋もれるような緑の中を駆けめぐる若き日の母をそこに描くも、僕の知る母とは一致しない。けれど、その母も確かに存在した。何者も恐れず、何物にも縛られずに輝いていた時代。母の幸福な記憶は黒麦の中にあつたのだ――。

「こう言っちゃなんだがね」。ギスランさんが声を落とした。「バロウ家で居候生活を始めてから、アネットは苦勞したと思うよ。農園で汗する傍ら、信心深いローランたちに合わせて足繁く教会へ通って、一家の習わしにも従って。そうして彼らに同化する事で、一人息子のあんたを守ろうとしたんじゃないのかな。あんたがバロウ家の人々に受け入れられるように」

僕は息を止めた。まるで一瞬、静かに死んだように。

「僕のために？」

注6 土着の因習、その地方に昔から伝わるしきたり、習わし。

注7 汲々として、心に余裕がなくて。

注8 居候、他人の家に住んで養ってもらうこと。

「もうひとつ……、一度だけアネットが私に洩らしたことがある。この世で一番怖いのは息子に死なれることだ、と。ルネを若くして亡くしたアネットは、いつだって死の影に怯えていた。その影からあんたを守るためならば、どんな迷信にだってすがりつく気でいたんじゃないのかな」

⑩「……」
緑だけだった。魂が抜け落ちたような僕のうつろな瞳に捉えられるのは、一面の緑だけだった。僕はその緑に吸われるようにゆらりと足を進め、緑の中へ沈みこんだ。膝を折り、緑の底に手を突き、崩れるように頭を垂れる。

目の下にちらりと白い光が灯った。早咲きの花。無数のつぼみが緑に抱かれて中、一株だけが茎の先に白い花をいくつもまとっている。僕は震える掌でそれを包み、小さな白い花びらを数え、そして慟哭した。

注9 慟哭、声をあげて激しく泣くこと。

(森絵都「ブレノワール」による)

問一 —— 線部①「今はパリの二つ星レストランにいる」とありますが、これにこめられた「僕」の

気持ちとしてもっとも適切なものを次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 母の意向に従わなかったのが今の成功があると伝えて母を謝らせよう。
- 2 一流の料理人になれたのは母の厳しさのおかげだと伝えて安心させよう。
- 3 母の意向に従わない生き方をしてきたことを正直に伝えて母からしかつてもらおう。
- 4 一流の料理店に勤めていることを伝えて母に自分の生き方を認めさせよう。

問二 ② ③ に入れるのにもっとも適切な言葉を次の1～6の中からそれぞれ選び、

その番号で答えなさい。

- 1 やせる
- 2 楽しむ
- 3 生きる
- 4 太る
- 5 苦しむ
- 6 作る

問三 — 線部④「母の瞳が用心深げな光をちらつかせた」とありますが、このときの「母」の気持ちとしてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 息子が珍しく自分の意に沿ったことをしているのか、と思いつつ、きちんと確認してから誉めようと思っている。
- 2 息子がまた自分の気に入らないことをしているのだろう、と思いつつ、きちんと事実を確認してから文句を言おうと思っている。
- 3 息子が珍しく自分の意に沿ったことをしているのか、と思いつつ、その期待が裏切られたときの失望が大きくなならないよう警戒している。
- 4 息子がまた自分の気に入らないことをしているのだろう、と思いつつ、その予測が今回は外れることを確信している。

問四 ⑤ に入れるのもっとも適切な言葉を五字で本文から探し、抜き出して答えなさい（句読点、記号も一字に数えます）。

問五 — 線部⑥「母の頑迷さに苛立ちながらも一方で僕は安堵した」とありますが、このときの「僕」の気持ちの説明としてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 自分に口げんかをふっかけてくる母を憎らしく思う一方で、口げんかができる元気が母にあることに安心もしている。
- 2 母と口げんかをしてしまったことを反省する一方で、口げんかの相手になったら母に生気がよみがえったことに満足もしている。
- 3 自分が母を怒らせるようなことしか言えないのに不満である一方で、口げんかで母の容態が悪化しなかったことにはほっとしている。
- 4 母と話せば口げんかになってしまふことを残念に思う一方で、それが母なりの愛情表現であることがわかって納得もしている。

問六 — 線部⑦「僕はなけば感心し」とありますが、「僕」は何に「感心」しているのでしょうか。それにあたるものとしてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 物事を難しく考えず明るい方面からとらえようとするサラの姿勢。
- 2 困難な状況を自ら打開し自分を導いてくれるサラの強さ。
- 3 どんなことがあっても自分を支えてくれるサラの優しさ。
- 4 将来を具体的に考えて方向を指ししめすサラの力。



問七 ⑧ に入れるのもっとも適切な十字以上十五字以内の部分本文から探し、抜き出して答えなさい（句読点、記号も一字に数えます）。

問八 — 線部⑨「黒麦畑で食べてる」の意味としてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 黒麦をたくさん生産している
- 2 黒麦にこだわってガレットを作っている
- 3 黒麦を売って生計をたてている
- 4 黒麦を自分の家で食べている

問九 ▼ ▲ではさまれた部分の中には改変を加えたためにつじつまのあわない箇所があります。その箇所を含む一文を抜き出し、その最初の三字を書きなさい（句読点、記号も一字に数えます）。

問十 — 線部⑩「……」とありますが、「僕」が無言になったのはどのようなことがわかったからでしょうか。四十字以上五十字以内で説明しなさい（句読点、記号も一字に数えます）。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

重ねて振り返れば、私が敗戦後の満州で受けた教育には、いくつかの特色、あえていえば、特異な意味がありました。

その一つは、教える先生も学ぶ私たち生徒も、授業で与える知識、授業で得る知識が何かの役に立つとはまるで意識していなかったことです。子供ながらに明日をも知れぬ生活を送っているわけで、将来などというものはおよそ考えられない。職業とはいかなるものであるか。あるいは、職業人が構成しているおとなの社会はどこにあるのか。そうしたものが視野にまったく入ってこないのです。

このことをべつの面から見れば、私たちは純粹に「教育のための教育」を受けていたといえるかもしれません。古代ギリシャの哲学者アリストテレス（前三八四～前三二二）は教育を二つに分け、「役に立つ知識のための教育」と「教育それ自体のための教育（具体的には哲学や芸術の教育）」があるとしています。この分類に従うならば、その時私たちは、まったくの偶然による環境の結果として、「教育それ自体のための教育」を受けていたのです。

満州で受けた教育の特色をもう一つ挙げるとすれば、知識が現実世界から完全に遊離していたことです。その知識が何らかの役に立つということがないばかりか、その知識が扱っている実物にすら触れることがありませんでした。理科がわかりやすい例になるでしょう。物理・化学・生物の三科目を習ったわけですが、実験設備は皆無、いわんや実物が展示してある博物館などはどこにもありません。実験もできなければ、実物に接することもできない以上、生徒たちはただただ文字のうえの知識に集中するばかりではなかったのです。

これから詳しく説明しますが、先に結論をいえば、教育とは生徒にたいして経験を拡大させる技術ではなく、生徒にたいして経験の仕方や経験の方法論を教えるものです。この意味でも、いささか逆説的にはなりますが、私は敗戦後の満州で「教育の原点」に触れることができたともいえるでしょう。

少し抽象的ない方になりますが、私たちが「経験」をするためには、意識するとせざるにかかわらず、経験のための方法ないしは形式をあらかじめ身につけていなければなりません。

ア、なかなか日常では気づかないことですが、風景を見るとき、私たちは知らず識らず遠近法によって見えています。今日、世界のどの国の人であれ、いわゆる一点消去の遠近法なしには何も見えてきません。ものを見るときは、じつは遠近法を実行していることと同義なのです。もし遠近法を知らない人が風景を見るとすれば、今日の私たちが見ているようには世界は見えてこないはずなのです。

注1 私が敗戦後の満州で受けた教育は太平洋戦争後、混乱を極める満州で、生き残った日本人たちにより学校教育は続けられていた。

注2 いわんや、まして。

注3 いささか逆説的にはなりますが、ちよつと矛盾した言い方にはなりますが。

注4 遠近法、近いものを大きく、遠いものを小さく描く絵画技法。ある一点を基準とし、精密な計算のもとに遠近法を用いる技法が「一点消去の遠近法」である。

イ、いうまでもなく、この遠近法とは、十四、五世紀、ルネサンス期のイタリアで発見されたものであって、太古からつづく人類永遠の知恵ではありません。一群の天才たちが発見し、多くの人々がそれに従ってものを見ているうちにいつしか身につく、ものの見方の基本となったのです。

この場合、遠近法というものの見方は、風景を見るときに経験に先んじてあります。擬声語を例にすれば、話はもう少しわかりやすくなるでしょう。世界のどの言語にも擬声語があります。そのさい、たとえば鶏が「コケッコ」と鳴くか、あるいは「コッカドゥドゥルドゥ」と鳴くかは、じつは文明の中でつくられたものの見方（聞こえ方）にほかなりません。地域によって、文明によって、聞こえ方はそれぞれに異なる。ウ、擬声語は個々の経験に先んじて私たちの体のなかにあるものであって、それを身につけると、不思議なことに、自然の鳥の鳴き声があたかもそのように聞こえてくるという仕掛けなのです。

もう一つ次元を高めていえば、たんに経験を積み重ねただけでは、世界を自然科学的に見ることはできません。物理や化学についていえば、すべての現象を数の関係に置き換えて、はじめてそれは可能になります。イタリアのガリレオ・ガリレイ（一五六四～一六四二）が「自然というものは数で書かれた書物である」といったように、数の関係を経験に先んじて知っていなければ、物質の世界は自然科学的には見えてこないのです。

もし教育とは何かと問われれば、遠近法や擬声語や数の関係にとどまらず、経験に先んじてある方法を教える行為だといえるでしょう。べつの表現をすれば、教育は経験を離れる必要があるということなのです。

こう考えてみれば、学校の教室というものが現実の社会から独立した世界、つまり閉じられた世界として存在し、その知識の八、九割までが言葉によって与えられていることの理由は明らかでしょう。もちろん、学校が閉じられた世界となるのは近代に入ってからのことでした。しかしながら、後に改めて詳しく論じますが、この近代が達成した成果は、じつは長く教育の歴史のなかで用意されていた、あるいは芽生えていたものなのです。

私たちにとって、学校教育はなぜ必要なのか。べつのいい方をすれば、それぞれの実生活の経験の積み重ねにまかせるのではなく、なぜ教育のための特別の場所が必要なのか。この問いかけにたいしては、いくつかの理由が考えられます。

第一に、これはわかりやすい理由ですが、世界はあまりにも広く、私たちがそのすべてを経験することはできないからです。

エ、私たちが「世界」と呼んでいるものの多くはすでに失われた過去であり、「現実」と呼んでいるものの半ば以上は現実には存在しません。歴史と呼ばれ、人類の記憶のなかにしかないものがほとんどでしょう。新聞やテレビで伝えられる世界はすでに「昨日の現実」にすぎないし、学問研究の保証する真実の世界も、結局は過去に発見され、歴史のなかで再確認されてきたものであるはずなのです。

注5 ルネサンス、十四世紀のイタリアに始まり、十六世紀にヨーロッパ全体に広がった学問・芸術・文化上の革新運動。

経験は記憶によって濾過され、それと照合されて、はじめて経験として完成される。そうした経験の完成の場所として、私たちは教育という営みを発明し、教室という別世界を囲い込んでいるともいえるのです。

森鷗外の短篇小説『サフラン』に、サフランをめぐる若き日の思い出話が出てきます。この植物の名は本で早くから知っていたけれど、まだ実物を見たことがない。そこで蘭医であった父親に頼み、薬箆筒の抽斗から「ちぢれたような、黒ずんだ物」、つまり乾燥したサフランを出してもらおう。「名を聞いて人を知らぬと云うことが随分ある。人ばかりではない。すべての物にある」といった感慨を綴った小品ですが、考えてみれば、われわれがいうところの「現実」とは、半ば以上、森鷗外における「サフラン」のようなものではないでしょうか。

第二に、教育が不可欠になるのは、私たちが何らかの現実行動をうまくなしとげるためには、行動をいったん棚上げし、目的を括弧のなかに入れて行動しなければならぬからです。いいかえれば、現実行動にあたって失敗を避けるには、まずもって「練習」をしなければならぬ。経験を離れることがいかに重要かは、この練習というものを考えれば誰しも納得がいくはずですが。

音楽や絵画のような芸術であれ、スポーツであれ、碁や将棋といった勝負事であれ、さらには実践的なすべての営みが、まず練習を要求しています。野球選手のバットの素振りや好例でしょう。飛んで来てもいないボールを相手にバットを振っている。そのことによって、彼はバッティングという行為のプロセスを意識し、そこからプロセスを支える「型」を身につけようとしているわけです。

私たちの行動能力は、単純な経験をいくら繰り返しても、けっして高まることはありません。現実行動は練習のうえではじめて成り立ちます。どんな技術であれ、技術を駆使するプロセスを絶えず見直し、身につけ直さなければならぬのです。

学校というものは、その意味で、あらゆる知識を現実行動からいったん切り離し、その行動のプロセスを教える場といってもいいでしょう。要するに、教室は④の場ではなくて、⑤の場なのです。

第三に、第二の理由の延長になりますが、私たちが行動するためには「型」を持たなければならぬということがあります。

武術一つを取り上げても明らかでしょう。刀をただ振り回していれば強くなるというものではない。面を打ち、籠手を打ち、突きを入れるという型をまず身につけ、それがまるで無意識であるかのように流露してくるところに武術は成立します。

日常の作法もまた同様でしょう。これもまた一つの型であって、日常生活はその枠組みによって支えられています。人間、悲しいときにはなりふりかまわず泣きたくなるものですが、そこに悲しみ方の型が入ってきたとき、はじめて私たちは悲しみに耐える能力も身につけることができるのです。

注6 濾過され、こしとられ。

注7 蘭医、江戸時代に、オランダから伝わった医学を学んだ医者。

注8 プロセス、やり方。手順。

注9 流露して、流れて出さずかのようにあらわれてくる。

問題

芥川龍之介の短篇小説『手巾』に、息子を亡くしたばかりの婦人が端然と息子の恩師に相対しながら、しかし机の下では「膝の上の手巾を、両手で裂かないばかりに緊く、握っている」という場面があります。つまり、「顔でこそ笑っていたが、実はさつきから、全身で泣いていたのである」とあるように、彼女は「息子を亡くした母」という型を、あるいは役をその場で演じることによって、身も世もない悲しみに耐えることができたし、また醜態をさらさず済んだわけですが。

教育が必要な理由の最後は、
⑦
現代の先進社会の人間ならば、誰でも地動説が正しいということを知っています。しかし、誰一人として地球が太陽の周りを回っているのを見た人もいなければ、その動きを実感した人もいない。日常では、太陽が朝は東の空に上って、夕方は西の空へ沈む。昔の人も現代人もそれを経験上知っています。しかし、真実はそうではないということを、知識として身につけているのが現代人でしょう。

また、幾何学で教わるかたちというものも見ることにはできません。幾何学上の「点」は大きさがなく、位置のみあるものだとはいくわいわれても、それを目で確かめることはできない。二点間をつなぐものが線であり、厚みのない広がりがあるといわれても、これまた誰も経験することができない。しかし、こうした知識が、現代の自然科学、あるいは現実認識の基礎をつくっているのはいうまでもないことです。今にして思えば、満州におけるきわめて特殊な極限状況のなかで、おそらく私たち生徒は現実からの隔離のゆえに、目に見えない、あるいは身体が触れることのできない普遍的な現実というものを感ずることができたのです。あのような体験は誰にもお勧めしたくないし、また二度と再現させてはならないものです。しかし、教育の本質を考えるうえで、得がたい一つの実験室であったことはまちがいありません。

(山崎正和『文明としての教育』による)

注10 端然と、きちんと、乱れずに。

問一 ア、イにあてはまるものを、次の1、2、3、4の中からそれぞれ選び、その番号で答えなさい。なお、同じ番号を二度以上使うことはできません。

- 1 しかも
- 2 しかし
- 3 つまり
- 4 たとえば

問二 —— 線部①「私は敗戦後の満州で『教育の原点』に触れることができた」とありますが、それはどういう環境にあったからですか。その説明としてもっとも適切なものを次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 敗戦後の満州では、将来生徒の役に立つ知識を教えられる教員もおらず、生徒はただ文字のうえから知識を吸収して学んでいくしかなかった。
- 2 敗戦後の満州では、哲学や芸術の教育を中心とし、理科学目に関しては、実験を行ったり実物に触れたりできないため軽視される傾向にあった。
- 3 敗戦後の満州では、学んだ知識が将来役に立つのかどうかを意識することはなく、また生徒が習った知識を裏付ける事物に直接触れる機会もなかった。
- 4 敗戦後の満州では、混乱した時代を生き抜くための知恵を生徒に与えることを目指し、机上の空論ではなく実際の経験を重視していた。

問三 —— 線部②「学校の教室というものが現実の社会から独立した世界、つまり閉じられた世界として存在し、その知識の八、九割までが言葉によって与えられていることの理由」について述べた次の説明文の [] に入れるのに適切な十七字の部分本文から探し、抜き出して答えなさい（句読点、記号も一字に数えます）。

教育とは [] であるから。

問四 —— 線部③「われわれがいうところの『現実』とは、半ば以上、森鷗外における『サフラン』のようなものではないでしょうか」とありますが、これはどういうことですか。その説明としてもっとも適切なものを次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 われわれは世界のすべてのことがらを実際に経験することはできないため、学んだ知識をもとにして「現実」を構成して世界を把握しているということ。
- 2 われわれは広い世界の物事のすべてに公平に触れることはできないので、各人が認識する「現実」の姿は限定され偏ったものにならざるをえないということ。
- 3 われわれは知識を通して世界の姿を学ぶがそれは真実とはいえず、実体験を積み重ねることによって見えてくるものが真の「現実」であるということ。
- 4 われわれは過去の歴史を学ぶことによってしか世界をとらえることはできず、結局真の「現実」の姿を認識することは決してできないということ。

問五 [] ④ [] ⑤ に入れるのもっとも適切な言葉を次の1～5の中からそれぞれ選び、その番号で答えなさい。

- 1 教育
- 2 練習
- 3 失敗
- 4 納得
- 5 行動

問六 —— 線部⑥「彼女は『息子を亡くした母』という型を、あるいは役をその場で演じることによって、身も世もない悲しみに耐えることができたし、また醜態をさらさず済んだわけです」とありますが、この例と同様に「型」が機能を果たしているものを次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 おむつの濡れた赤ちゃんが泣いて母親を呼ぶ。
- 2 相手に馬鹿にされて我を忘れてつかみかかる。
- 3 音楽会で感動した聴衆が拍手をする。
- 4 ベッドで読書をしていていつの間にか寝てしまう。

問七 [] ⑦ に入れるのもっとも適切なものを次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 知識をいくら学んでもそれだけでは役に立たないからです
- 2 多くの知識が経験からは直接に学べないからです
- 3 経験に裏付けられない知識は無意味であるからです
- 4 学問の完成に知識は不可欠であるからです

問八 —— 線部⑧「現実からの隔離のゆえに、目に見えない、あるいは身体が触れることのできない普遍的な現実というものを感ずることができた」とありますが、これはどういうことですか。その説明としてもっとも適切なものを次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 現実社会から余計な干渉を受けなかったために、周りの状況に左右されない強固な信念で現実をとらえられるようになったということ。
- 2 現実社会から閉ざされていたために、普通の状態では決して見ることでできない世界の真の姿をとらえられそうな気がしたということ。
- 3 現実社会とかけ離れた環境にいたために、現実ではない空想世界のできごとのように世の中をとらえる感覚が身についたということ。
- 4 現実社会との接触が希薄であったために、理論や法則を通して世界を抽象的にとらえる方法に気づくことができたということ。

問九 学校教育のあり方として筆者の意見と同じものを次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 生徒たちは現実社会からの影響を受けやすいので、学校現場と現実社会とは切り離されている必要がある。
- 2 学校教育においては知識の習得が大事なのであり、実験や体験学習よりも理論を学ぶことを重視すべきである。
- 3 学習に大切なのは何よりも知的好奇心であり、好奇心を損わないような工夫が授業においては重要である。
- 4 生徒にとっては経験を通して自ら発見することが重要であるので、単なる知識の伝達に留まる授業は避けるべきだ。

問十 筆者は「遠近法」や「擬声語」という例を通して、そこにどのような仕組みがあると考えていますか。四十字以上五十字以内で説明しなさい（句読点、記号も一字に数えます）。

■ 罫罫罫罫

三

次の——線部①～⑧のカタカナの部分に漢字で、⑨・⑩の漢字の部分にひらがなで書きなさい。いずれも一画一画をていねいに書くこと。

- ① チンタイ住宅を借りる。
- ② ツウカイな冒険小説を読む。
- ③ ゾウキ林の中を歩く。
- ④ フンキを期待したい。
- ⑤ その点に関してはゼンシヨします。
- ⑥ 彼の探究心にはケイフクする。
- ⑦ 飛行機をソウジュウする。
- ⑧ 事前準備をして会議にノゾむ。
- ⑨ 説明を割愛する。
- ⑩ 労力を費やす。

(以下余白)

国語解答用紙

受験番号

氏名

得点

※注意 一、二、三の解答欄は設問の順序通りにはなっておりません。
答えの形によって順序を変えてありますので、まちがえないこと。

一

問一

問二 ②

③

問三

問五

問六

問八

問四

問七

問九

問十

50

40

二

問一 ア

イ

ウ

エ

問二

問四

問五 ④

⑤

問六

問七

問八

問九

問三

問十

50

40

三

⑨	⑤	①
⑩	⑥	②
やす		
	⑦	③
	⑧	④
		む